

新著紹介

無窓遺稿

無窓遺稿一卷は今は亡き野崎廣義氏が此世に遺されし形見である。野崎文學士は京大哲學科を大正三年に出られたのであつた。私は大正四年に入學したので氏と親しく接するの機は殆ど恵まれなかつた。しかし西田先生のヘーゲル講義の時間にいつも顔を合せたあの眼光の透つた眉目の秀でた、何處かに人を許さぬやうに見えながら時としては滔々と語つて已まない風の氏を今だにありありと思出すことが出来る。到底相手にもなれない口吻の鋭どい人と思つた、裸かの針の尖の様に感じの鋭どい人と思つた、すべてが鋭どいと云ふ感じに充たされてゐたのであつた。大正六年の六月十八日友人から前夜野崎氏が急病で途に仆れたと云ふ話をきいて非常に驚いた。けれど私は猶氏のお葬に會し得なかつた程氏のすべてと遠い人間であつた。それから三年餘りの月日が流れた。いつしか氏の思出も私の胸から消去つた。かう云ふ私が無窓遺稿一卷を手にしたことは或は偶然であつたかも知れない。しかし私は此一卷を讀み了つてどんなに深く動かされたことか。正直に云へ

私は此一卷を通して甫めてはつきりと未だ見なかつた畏友野崎氏を見出したのであつた。野崎氏の短かい一生に就いて何等語るべき資格のない私は只この一卷を通してのみ見出した野崎氏に就いての短かい感想を捧げて、今は遠く靜かな氏の靈前に額づきたいと思ふのである。

私は一番深く氏の日記と論文「懺悔としての哲學」に動かされた。その死に近き大正六年五月廿五日廿六日に誌された極めて短かい感想を讀んで、大きな悲劇の終幕近くに追ひつめられて息もつき得ぬ様な心持になつた。「首まで沈みゆかなければならぬ汝よ。もう一寸が命だ」。大正五年時分もがきにもがきあせりにあせつて眞理を眞理と叫んでゐた様な氏、眞理のためには帝王の様な羈氣さへ自負すると共に神を求めて額づく淨き心根を忘れ得なかつた様な氏が「もう一寸が命」だと記す時、どんなに胸を壓されてゐたであらう。「懺悔としての哲學」の第二篇は大正五年十二月にもしたと云ふ第一篇にも足らなくて、氏が亡くなる極めて近く夜を徹して書き改められたもので眞に氏の絶筆ださうである。恐らくあの氏の短かい一生を象徴するものは未完のまゝに遺されしこの一篇であらうと思ふ。「たえず眞理に於て考へると云ふことは少くともその中に身を投げ入れたものには新生の必展である、従つて神自身ならば知らぬこと、現實と空想の中から躡つ

て来たものにはそれは絶えず自己の罪を悔ゆる過程である、懺悔がないならば哲學がない」と云つてそして懺悔の哲學であつたために益々論理的に嚴密でありひたすら根本的たらんことを熱望せねばならぬと云つた氏は大正五年末の氏であつた。絶に於てはかゝる論理の徹底をば眞實の心根に求むる言葉を強く聞き得ねまて

に氏の心は沈んでゐる。運命の予感に襲はれたのであつた。斷篇の最後に氏は、自分の對象とし自己の問題として一心に求めんとしたものが却つて自己の受用でなく、自己の逃れんとしてあせつた運命がその姿をいよいよ明確にして暗黒と冷たさの追求がいよいよ激しくなつた來た、そして自己の受用しないところのものが却つて自己を追求してやまないことがあると云ふことを悟つた、但し、こがあると云ふ言葉は特稱的表現であるけれど生活その時その場合に於てそれは全稱的の力をもつて現はれて來るものであると記してゐる。そして求むるものが求められず逃れんとするものに追究せらるゝデイルンマの前に死ぬるばかりの不思議を感じただけであると記してゐる。其死に先立つ極めて短かい前の深夜に於て記して來た氏の心持は私達の想像に餘りある。すぐれて鋭感なたましひは確かにカダストロフを予感したに相異ない。そしてそれが懺悔としての哲學の行き届くべき靜かに深い溪間ではなかつたらうか。この未完の一篇はまことに吾等の心根を

血の滴るばかり軋つものがある。私は私の心のあはれさを一層深く感ずると共に眞理の前に涙を流しま心より頼つた氏に一層深き感謝を感せずには居られない。

氏の思索的勞作を示すものとして哲學概論（未定稿）と論文、哲學史の本質について」の如き氏の頭腦の透明さを最もよく示してゐるものと思ふ。哲學概論に於ては第三章價值と存在が氏の持に意を用ひた處であらう。價值と存在を峻別しひたすら純論理的對象のみ認識對象として把握せんとする西南學派の立場もまた作用と對象とを區別し一方に於て心理と論理とを混同せしめざらんとしつゝ他方に於て認識を作用に於て闡めんとする獨逸學派の立場も、また反對にRationalismを排して純粹經驗や純粹持續の流の中に意識のすべてを融かきんとするジェームス、シラーやベルグソンの立場にも十分満足を感じなかつた。氏はヘーゲルの哲學を深く愛しヘーゲル哲學の眞隨に由つて相容れざるIrrationalismとTranscendentalismとを超越せんと試みた様である。氏はかゝる第三の立場を内在主義と呼んでゐるが、それはシュツペー派のそれならざること云ふまでもない。何處迄も論理的立場に留まりつゝ純粹思惟の創造的發展を明かにせんとしたのである。

「哲學史の本質について」に於て注目すべきは哲學史の本質が單なる歴史的事實の記載にもなく、又現在自己の把持する哲學的

原理に由りて過去の思想を批評することでもなく哲學的原理そのものが不可知と可知を超越してしかも可知に即しつゝ不可知が自らを現じ來る過程即ちphilosophierenの過程について、philosophierenの尖端が益々鋭く深くなるために更に更にNachphilosophierenしなければならぬことに存すること、そしてそれは獨りphilosophierenの手に由つてのみなされること、それは過去のphilosophierenの批評でなく現在の哲學原理を導くEinleitungであると見るの思想であらう。

眞に考へると云ふことが即ち懺悔であるならばわが思想わが懺悔は萬人の前にさらけ出して萬人の石に打たれねばならないと云つた故人。故人自らならばこそ、さならずして故人と生前深き知己もなかつた私が此處に此一巻を紹介することは故人の眞の意志に叶ふものではあるまいと思はれる。とは云へこれも故人と時を距て、結ぶべき不思議の縁として許されんことを祈る。

目次、哲學概論(未定稿)、懺悔としての哲學、哲學史の本質に就いて。哲學的思想と藝術的情緒、無限を追ふ心、抽象を追ふ心。論理的に就いて。日記(明治四十四年度、大正五年度、六年度五月迄)外に跋として西田先生、花田、立木、榎本、小笠原諸氏の感想、編輯者小笠原秀實、非賣品。一一、一〇務臺埋作)

普遍への復歸と報酬の生活 西晋一 郎著

吾等に國民生活が存するならば吾等にまことの國民道徳があらねばならない。何をか國民生活と云ふのであるか。果して眞に國民生活と呼び得るものが存するであらうか。個人は社會に即し社會は個人に即すると云ふ言葉はこの間に對して極めて簡便に役立てられるが、然しこの言葉ほど如何様にも意味深くまた如何様にも皮相に留まり得るものはない。單に心理學的社會學的に人性と社會を解剖して人性の自然より二者相即の理を説くにしてもそれは只本能的集合生活を説くより外に新しい意味を見出し難いであらう。また反對に個人相互の權利を保護するための手段として強制的又は約束的團體生活が督まるゝと云ひ得るにしても個人の權利を何によつて基礎附け得るか説明し難いであらう。國民は動物的本能的社會の産物でもなくまた單なる市民的社會の一員でもない。國民は眞に道徳的理性の自覺の上に見出されねばならない。國民的自覺は傳統的なる權威や命令的な壓制の下に見出さるものでなく自然的若しくは法制的社會を理性化して一切を文化精神の發願と見るべき人間理想の根本義に基かねばならない。それ故によく考ふれば國民あつて國民道徳あるのでなく自覺せる國民性あつてはじめて眞の國民あるのである。國民性の自覺即ち國民道徳